HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	藤田, 正一
Citation	, 14, 1-10
Issue Date	2007-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59502
Type	book
File Information	hakubutsukan14.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 1345-059X

14 号

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学総合博物館ニュース

「昆虫記」刊行100年記念日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」展

ジャン・アンリ・ファーブル(1823−1915)は、南フランスで昆虫を観察しつづけたアマチュア昆虫学者です。日本では『ファーブル昆虫記(*Souvenirs entomologiques. Etudes sur l'instinct et les moeurs des insectes*)』はとても有名で、その著者であるファーブルは、日本人にもっともよく知られたフランス人の一人に違いありません。

『昆虫記』の最終巻の第10巻が出版されたのは1907年です。今年2007年はちょうど出版後100年目に当たり、その記念として今年から3年にわたり日本国内の5つの博物館(北海道大学総合博物館:札幌、国立科学博物館:東京、滋賀県立琵琶湖博物館:草津、兵庫県立人と自然の博物館:三田、北九州市立自然史・歴史博物館いのちのたび博物館:八幡)とフランス(国立自然史博物館:パリ)で、「ファーブルにまなぶ」展と題して、展示会が開かれます。

展示構成は、(1)プロローグ:ファーブルと南フランス、(2)昆虫記の世界、(3)ファーブルの時代と日本、(4)11巻目の昆虫記〜『昆虫記』から昆虫学へ〜、(5)エピローグ、となっています。

フランスからは、ファーブルが研究し集めた昆虫、貝、化石、植物などの標本類(ファーブルは昆虫のみならずいわゆる博物全般の標本をあつめていました)、昆虫記の初版本などが、展示のために日本に来る予定で、(1)(2)部分の展示に使われます。ファーブル自身と昆虫記の紹介は、この展示の一つの見どころになるでしょう。

最大の見どころは、(4)「11巻目の昆虫記〜『昆虫記』から昆虫学へ〜」の展示です。この部分は、この100年間の「昆虫学の進歩と発展」についての展示です。昆虫記が出版されてから現在までに、フランスからみて地球の裏側にある東洋の国日本で、「ファーブル昆虫記」を読んで多くの人が刺激をうけました。そして「日本のファーブルになる」という夢をもって昆虫学に専念した研究者や、子供の頃に「昆虫記」を読んで科学の面白さを知り、昆虫学とは別の分野の科学者になったという例が、日本には実に多いのです。

北海道大学の教授であった坂上昭一先生は、ハナバチの行動学・分類学の世界的な研究者でした。坂上先生は、京都大学の岩田久二雄先生が「ファーブルの弟子」と自称してカリバチの研究をされていたのに刺激されて、岩田先生の研究していないハナバチの研究を始めました。ファーブルさんと岩田先生のハチの研究に魅せられたのです。ですから、坂上先生は「ファーブルの弟子あるいは孫弟子」ということになります。坂上先生の門下生は、現在、北大の昆虫学の教授や国内の大学・研究所の昆虫研究者になっています。日本の昆虫学をリードしている研究者は、ファーブルの曾孫弟子たちとなるわけです。

(4)の展示コーナーでは、日本で発展したハチ学(特に社会性の進化)、養蚕学、養蜂学、応用昆虫学、昆虫の分子生物学、昆虫ロボットなどの多彩な研究成果が分かりやすく展示される予定です。

期間中に北大のバリエーション展示として、「北大の昆虫学」と「北海道大学所蔵の南フランス昆虫標本」の展示も同時開催されます。ご期待ください。

(次ページにつづく)

ファーブルの生家前の立像。南フランス・サンレオン。

目　次

ページ1：・「昆虫記」刊行100年記念日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」展(片倉晴雄・大原昌宏)
ページ2：・北大創基130周年記念企画展示
ページ3：・企画展示
ページ4：・The Wonder Box —ユニヴァーシティ・ミュージアム合同展—
・レイチェル・カーソン展について(近藤務)
ページ5：・総合博物館国際(公開)シンポジウム(天野哲也・阿部剛史)
ページ6：・着任のご挨拶(湯浅万紀子)
・特任教員紹介(阿部剛史・小林快次)
ページ7：・北大総合博物館とバリアフリー(小俣友輝)
・寄附のお礼
ページ8：・ボランティアの会会長就任のご挨拶(在田一則)
・平成18年4月から平成18年9月までにおこなわれたセミナー
ページ10：・平成18年4月から平成18年9月までの主な出来事
・お知らせ・お礼

Jan. 2007
ISSUE 14

北海道大学総合博物館　　2007年1月発行

この日仏合同企画展示の経緯について、少し記しておきます。滋賀県立琵琶湖博物館とフランス国立自然史博物館は博物館間協力協定を結んでおり、今回の企画展の案が持ち上がりました。琵琶湖博物館の川那部浩哉館長からの呼びかけに日本の5館が名乗りを上げ、現在はフランスも含めた6館が協力をしながら、2007年開催を目指して準備を進めているところです。通常の巡回展は、一つの博物館が展示を作成して、その他の館がそれを借用して巡回するものが多いようです。今回の「ファーブルにまなぶ」展は、6館がシナリオの段階から共同で企画する全館にとってのオリジナル展示であり、このような巡回展は珍しく、自然史系では初めての試みでしょう。

「ファーブルと昆虫記については、フランス人よりも日本人の方がよく知っている」という話があります。おそらくは1922年に出版された最初の翻訳本(大杉栄訳)が大変有名になり、その影響がその後も続いているからでしょう。しかし、今も多くの人が『昆虫記』の魅力に取りつかれているのは、ファーブルの詩的な文章と科学の面白さを伝えてくれる彼の鋭い観察眼や実験が、新鮮で本当に素晴らしいことが理由だと思います。

今年、北大にファーブルと昆虫学がやって来ます。それまでにぜひ『昆虫記』を数冊読んでみて下さい。展示が待ち遠しくなること受け合いです。

◆「昆虫記」刊行100年記念日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」展
◆2007年7月1日から9月17日まで。北海道大学総合博物館にて。無料(寄附をお願いしています)。
◆北大での開催後は、国立科学博物館(東京・秋)、北九州市立自然史・歴史博物館いのちのたび博物館(八幡・冬)、滋賀県立琵琶湖博物館(草津・2008年春ー夏)、兵庫県立人と自然の博物館(三田・夏)、フランス国立自然史博物館(パリ・2009年)へ巡回します。

片倉晴雄
(理学研究院教授／昆虫分類・進化学)
大原昌宏
(研究部助教授／昆虫体系学)

ファーブル昆虫記が執筆された「アルマス」の自宅。南フランス・オランジェ。

南フランスで採集された昆虫類。コガネムシ(糞虫)、タマムシ、ハムシ、カッコウムシなど。

北大創基130周年記念企画展示

「山は厳父　小屋は慈母 『北大の山小屋』展」

山岳系クラブOB等で構成する北海道大学の山小屋展実行委員会と共催で、平成18年7月4日から10月15日まで「山は厳父小屋は慈母『北大の山小屋』展」を開催しました。

この企画展示は、本学の特色ある資産である山小屋の歴史・価値・魅力を多くの方々に知っていただき、有効活用を促すこと、自然科学への興味、人格の形成など、様々な形で将来に役立てる一助となることを意図しました。また、青少年の野外活動など、広く一般市民の利用を促す契機とし、北海道大学の地域貢献をアピールしたいとの趣旨も兼ねて企画され、関係者の熱意で実現したものです。

会場には大正末から昭和初期にかけて建設された日本では最古の本格的スイス式ヒュッテとして貴重な山小屋の模型や、実際に使用した貴重なスキー用品等も展示されました。

「二十一世紀の武士道 ～北大に通底する精神の系譜～」

平成18年9月4日から11月26日まで、3階企画展示室で「二十一世紀の武士道～北大に通底する精神の系譜～」を開催しました。

本学は明治9年に学士号を授与する日本最初の大学である札幌農学校として創設されました。以来、130年の歴史の中で本学に通底する学問の精神を、クラーク博士や内村鑑三、新渡戸稲造等の教師や研究者の言葉を中心にして紹介し、併せて、さまざまな学術標本・資料を展示することで、研究者の足跡や北大の学風の一つであるフィールド主義を紹介しました。9月4日に行われたオープニングセレモニーでは、本学を自然科学系総合大学として確立させた功労者で農学校長、帝国大学総長として活躍した佐藤昌介初代総長のひ孫　キーン・昭子氏の記念講演が行われる等、企画展は3ヶ月に及ぶロングランとなり、期間中、多くの市民等が見学に訪れました。

「北海道農業の発展と北大農場」

平成18年9月12日から9月24日まで、「北海道農業の発展と北大農場」展を1階知の統合コーナーで開催しました。

今年が、北大農場にトラクター「フォードソンメジャー」が導入されて50年の節目の年となることを記念し、北海道農業の発展と北大農学部・農場の関わりを歴史的にたどることで、本学が果たしてきた役割を学内外に紹介しようと、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場が中心となり企画されたものです。

企画展示では、北大農場に本格的第1号ホイールトラクター「フォードソンメジャー」が導入された1956年から今日に至るまでの北海道農業の歴史を紹介しながら、メジャーが畜力主体の作業体系から機械化農業への道を歩み出した過渡期時代と農作業全般の機械化作業を実現させていった発展期の重要な担い手として、北海道における機械化体系に大きな貢献を果たしてきたことを貴重な機材や資料で紹介しました。

第32回企画展示「金津墨岱(雄三)遺蔵書作品展」

第32回企画展示「金津墨岱(雄三)遺蔵書作品展」を平成18年6月6日から6月18日までの前期展示と6月20日から7月2日までの後期展示の2回に分けて3階企画展示室で開催しました。

北大理学部附属札幌臨時教員養成所(生物学科)を卒業した墨岱氏は若い時分から非凡な書の才能を認められ、野心的な作品を次々と発表する一方、昭和61年に北海道書作家展を設立し、書の発展と後進の育成に尽力するなど、書道界に多大な影響を与えてきました。その傍ら、中林梧竹をはじめとする古今の書作品、中国の古拓本などの収集にも情熱を注がれ、その数は膨大なものになっています。この企画展で公開された貴重なコレクションは、墨岱氏の高い鑑賞眼と中国古典への深い造詣を物語るものであり、企画展示開催期間中は多くの市民等が会場を訪れ熱心に鑑賞していました。

第34回企画展示「2000年 有珠山噴火 ～活きる山と生きる～」

第34回企画展示「2000年　有珠山噴火～活きる山と生きる～」を平成18年7月11日から8月6日まで、1階知の統合コーナーで開催しました。

2000年3月31日13時7分、有珠山が22年7ヶ月ぶりに噴火しましたが、事前の噴火予知によって住民の避難はすでに終わっており、噴火による犠牲者は1人もいませんでした。この舞台裏には、20～50年の周期で噴火を繰り返し、前兆が明らかという有珠山の性格と、この地域に住み山を見守り続けた地域住民や行政・研究者たちの姿がありました。

2000年の噴火に対して、地域住民をはじめ多くの人々は何を思い、どう動いたのでしょうか。本企画展示は北大大学院文学研究科佐々木亨ゼミのメンバーによって企画・調査・準備が行われ、その結果を写真や画像、噴火石などの実物資料と共にわかりやすく展示したものです。

第35回企画展示「モンゴルの恐竜 ～大型恐竜と鳥類の進化～」

第35回企画展示「モンゴルの恐竜～大型恐竜と鳥類の進化～」を平成18年7月22日から8月26日まで、3階企画展示室で開催しました。

当館の小林快次助手の企画で、世界で注目を浴びているモンゴルの恐竜研究の成果を展示として一般に公開することで、モンゴル建国800周年記念と本学の創基130周年の記念すべき年を共に祝おうとの趣旨で開催されました。

企画展示はモンゴル国から発見されている恐竜化石の紹介が中心で、展示のシンボルであるタルボサウルスとサウロロフスの頭骨化石の他、モンゴル国恐竜化石の研究成果に基づき、10メートルを超える恐竜の生態や鳥類が恐竜から進化していく軌跡を紹介しました。借用資料はすべてモンゴル国古生物学センターが所蔵しているもので、13点の恐竜標本中、9点が本物でした。展示期間中に訪れた約2万人の市民らは、迫力十分な展示に歓声をあげていました。

The Wonder Box —ユニヴァーシティ・ミュージアム合同展—

平成18年11月4日から12月17日まで東京藝術大学大学美術館において「The Wonder Box —ユニヴァーシティ・ミュージアム合同展—」(以下「合同展」)が開催されました。この合同展はユニヴァーシティ・ミュージアムの今後の発展のための一里塚として企画され、国立大学博物館等協議会に加盟している37機関のうち25機関が参加しました。各館が自由に選んで出品する方法で、当館からは「ニッポノサウルスの復元骨格及び頭骨の一部(実物)」を出品しました。

また、合同展オープンの前日の11月3日には大学博物館等協議会の館長会議も開催され、協議会のアピール文、会則等について話し合われました。

レイチェル・カーソン展について

農薬による環境汚染にいち早く警鐘を鳴らした「沈黙の春」、自然の神秘さや不思議さへの感性の大切さを伝えた「センス・オブ・ワンダー」など、優れた著作を残してくれたレイチェル・カーソン女史。

環境の世紀とも言われる21世紀に入り、彼女が現代に残してくれたものは、ますます重要な意味を持ってきているように思われます。

2007年5月27日は、レイチェル・カーソンの生誕100年にあたります。私たちは、彼女の果たした役割や思想を学び、それをより多くの方々に知っていただくために、「レイチェル・カーソン生誕100年記念・北海道の会」を2006年9月1日に設立いたしました。

私たちは、右記の記念行事(予定)を支える活動を進めてまいりたいと存じます。皆様の記念行事へのご参加と当会へのお力添えをお願い申し上げます。

右記の記念行事のうちパネル展は、北海道大学総合博物館、北海道大学サステイナビリティ・ガバナンス・プロジェクト(SGP)、レイチェル・カーソン日本協会の3者の共同での開催となる予定です。関係の方々のご配慮・ご指導ならびにご尽力に心からの感謝を申し上げます。

近藤　務
(レイチェル・カーソン生誕100年記念・北海道の会)

〈記念行事予定〉

○レイチェル・カーソン生誕100年記念の集い

2007年5月27日(日)　午後

記念講演　北海道大学総合博物館長　藤田正一氏

○パネル展

(開催期間 2007年7月1日～9月17日)

北海道大学総合博物館　3階(「ファーブル展」と同時期開催)

○記念講演会(パネル展開催期間中)

- 記念講演　上遠恵子氏(レイチェル・カーソン日本協会理事長)(「センス・オブ・ワンダー」などレイチェル・カーソン翻訳家、エッセイスト)
- 記念講演　原　強氏(レイチェル・カーソン日本協会専務理事)(レイチェル・カーソン研究家、「『沈黙の春』の世界」著者・大学講師)
- 映画「センス・オブ・ワンダー」(制作:グループ現代)上映

〈関連行事〉

当会では、レイチェル・カーソンの著作から学ぶ学習の集いを、予定しております。お気軽にご参加ください。

時間:午後6時15分から8時30分

場所:北海道大学遠友学舎
(札幌市北区北18条西7丁目)

2007年

1月24日(水)「沈黙の春」

2月22日(木)「海のなか」「潮風の下で」

3月22日(木)「われらをめぐる海」「海辺」

4月26日(木)「センス・オブ・ワンダー」

「会」連絡責任者
近藤　務
rc100hokkaido@yahoo.co.jp
fax:011−375−3454

総合博物館国際(公開)シンポジウム

第15回「骨から探るオホーツク人の生活とルーツ」

平成18年7月8日、北大学術交流会館において国際シンポジウム「骨から探るオホーツク人の生活とルーツ―形質人類学・遺伝学による研究―」を開催しました。

シンポジウムでは、まず、平成15年末に医学研究科から500体にのぼる大量のオホーツク人骨を総合博物館へ移動したのを機に分析等をすすめてきた結果、オホーツク人の暮らしや社会を解明するための重要な手がかりが得られたことが紹介されました。

次にオホーツク人とはだれかと言う問題、すなわちオホーツク文化の担い手集団が形質的にどのような特徴をもち、それはどのように形成され、当時の近隣諸集団とどのような関係にあり、その後どのような変転を重ねたか、またその結果、アイヌ民族を含む今日の民族とどのような関係にあるかが活発に議論されました。

そこでは、オホーツク人の系統問題の解明を困難にしている原因のひとつは良好な資料が依然として乏しいこと。いまひとつは、系統を表現する形質的特徴が充分把握されていない点が指摘されました。

このシンポジウムではもう一つ、オホーツク人の病変・傷害資料の医学的・法医学的分析から、当時の暮らしと社会状況の復原が議論されました。

総合博物館特任助教授のモイセーエフ博士ほか10人の研究者による講演及び研究報告では、形質人類学的、DNA遺伝学的にはオホーツク人はウリチやニヴフ、ネギダルなどアムール下流域ーサハリン

北部の諸民族とコリャークやチュクチなどオホーツク海北岸地域の集団がミックスした要素をもち、その混血の舞台はオホーツク海西岸地域であった可能性が指摘されました。

天野哲也(研究部助教授／考古学)

第16回「北太平洋域のコンブ研究」

今年で創基130周年を迎えた本学に通底する精神の一つに「実学の精神」があります。近年、同じ言葉が、金儲けに直結する研究といった意味合いで用いられることがありますが、ここで言う実学とは、そのような意味ではありません。現実をつぶさに観察し実体験から原理原則を導く実証主義、孫引きでなく原著論文を参照する原典主義、フィールドワークと実物標本の重視、現場主義、実践主義。こういった教育・研究態度を指した言葉が、札幌農学校より発するところの「実学の精神」です。

日本のコンブ類の学術的な研究は、札幌農学校二期生であった宮部金吾によって本格的に開始されました。このため本学は、我が国における海藻研究の中心として、長い伝統を誇ります。総合博物館では、平成18年7月から3ヶ月間の任期で、カナダの高名な海藻学者Druehl Louis Dix博士を特任教授として招聘しました。これに際し、北大創基130周年記念企画の一環として、日本からカナダにかけての北太平洋域のコンブ研究をテーマとした公開シンポジウム「北太平洋域のコンブ研究～宮部金吾より連綿と続く実学の精神～」を、平成18年9月22日、「知の交流」コーナーにおいて開催しました。

シンポジウムの演者としてお招きしたのは、日本の第一線で活躍するコンブ研究者の方々です。奇しくも臨海実験所や水産試験場といった“現場”の面々による研究報告となったことが示すとおり、コンブ研究の分野には、宮部以来の「実学の精神」が生き続けているのです。

当日は、総合博物館専任教員による開会挨拶と趣旨説明に続き、まず北海道大学北方生物圏フィールド科学センター室蘭臨海実験所の四ツ倉典滋氏による、コンブ研究の現状と課題についての講演が行われました。それに続き、和歌山県水産試験場の田中俊充氏による暖海性コンブについての講演、青森県水産総合研究センターの桐原慎二氏による本州のマコンブについての講演、北海道立中央水産試験場の津田藤典氏による北海道のホソメコンブについての講演が行われ、休憩

を挟み北海道原子力環境センター水産研究科の川井唯史氏によるアイヌの人々とコンブの歴史に関する講演、Druehl特任教授によるコンブ類の多様性と最新の分類に関する講演が行われました。会場には一般市民の他、宮部に続く日本のコンブ研究者の三大巨頭とも言うべき長谷川由雄・元北海道区水産研究所長、川嶋昭二・元函館水産試験場長、舘脇正和・元北大海藻研究施設長もお見えになり、活発な議論が交わされました。

阿部剛史(研究部助手／海藻分類学)

着任のご挨拶

2006年11月から総合博物館で博物館教育を担当しております。着任後すぐに感じたのは、当館では実に多くの「人」が活動しているということでした。当館に集う教職員、学生、ボランティアの活動を目の当たりにすると、当館が教育・研究の現場であることを実感します。今後、総合大学の「大学博物館」としての特色を更に活かし、学生が自身の所属する研究室では出会えないような異分野の学生や教職員、ボランティア、学外の方々と協働し、学術標本の研究をベースにした博物館活動の担い手となるプログラムを実践していきたいと考えます。

個人的な研究テーマとして、博物館体験が人々に与える長期的なインパクトの検証と評価に取り組んでいます。認知面での学習に限らない博物館体験のインパクトを明らかにすることで、博物館の魅力を包括的に捉え、博物館活動への指針を探ります。

当館での体験が人々の記憶に刻まれていくように、尽力していきたいと思います。

湯浅万紀子
（研究部助教授／博物館教育学）

〈湯浅助教授略歴〉
2003年3月　東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻　修士課程修了
2005年9月　同上　博士課程単位取得退学
2005年11月－2006年10月　東京大学総合研究博物館ミュージアム・テクノロジー寄付研究部門　リサーチフェロー

特任教員紹介

○特任教授

総合博物館では、平成18年7月1日から9月30日までの3ヶ月間、特任教授としてカナダ・サイモンフレーザー大学名誉教授Druehl L. Dix博士を招聘しました。コンブ類の生態学・分類学で著名な研究者で、34年前には室蘭の北大海藻研究所（現・北方生物圏フィールド科学センター室蘭臨海実験所）で8ヶ月の研究生活を送った経験を持つ、日本酒と焼き鳥を愛する親日家です。

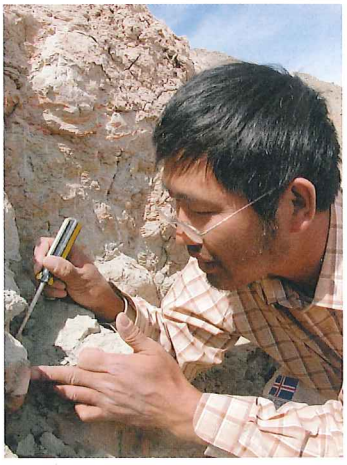
コンブ類は北方性の海藻であり、Druehl博士の研究所があるカナダ西岸バンクーバー島からアリューシャン・カムチャツカ・千島を経て北海道へ至る海域のコンブ類の比較研究は、日本のコンブ類の理解を深める上で非常に有益です。今回の滞在中は、コンブ類のうちで生長帯が解明されていないアイヌワカメ属について、当館の阿部剛史助手および室蘭臨海実験所の四ツ倉典滋助手との共同研究を行い、蛍光染色を用いた培養実験によってこれを明らかにしました。また、アイヌの人々によるコンブ利用の歴史について、北海道原子力環境センターの川井唯史研究員との共同研究に着手しました。そのほか、国際湿地保全連合による知床の藻場調査への同行、岩内町海洋深層水事業や北海道立中央水産試験場、南茅部コンブ種苗センターの訪問、室蘭と岩内での学術講演、当館で開催された国際シンポジウムなどを通じて、多くの日本人研究者と交流し、意見交換を行いました。

氏　　名：Druehl Louis　Dix（ドゥリュ　ウエル　ルイス　ディクス）
専門分野：海産藻類学
略　　歴：1936年生まれ、ワシントン州立大学卒業、ブリティッシュコロンビア大学にて学術博士取得、現在サイモンフレイザー大学名誉教授

阿部剛史（研究部助手／海藻分類学）

○特任助教授

総合博物館では、平成18年10月23日から平成19年1月15日まで、中国地質学院地質研究所呂君昌（Lü Junchang）博士を特任助教授として招聘しました。滞在中は、翼竜類の系統解析、中国ジュラ紀の竜脚類、恐竜の病理学などについて総合博物館の研究者と共同研究を行いました。呂博士は、中国の恐竜や翼竜を含む古脊椎動物学の研究で著名な研究者で様々な成果を挙げています。平成18年1月7日には総合博物館において国際シンポジウム「東アジアにおける中生代脊椎動物化石の多様性」を開催し、その際には「中国の翼竜における系統学・生理学の研究」の演題で共同研究の成果をご講演いただきました。



氏　　名：呂　君昌
専門分野：古生物学
略　　歴：1965年生まれ、蘭州大学卒業、サザンメソジスト大学にてPh.D.取得、現在中国地質科学院地質研究所准教授

小林快次（研究部助手／古生物学）

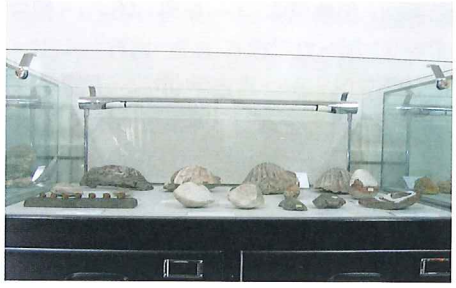
北大総合博物館とバリアフリー

北大総合博物館は旧理学部の建物をそのまま利用しており、その外観の落ち着いたたたずまいと改装された内部の清潔感とが一体となり、創設以来来館者を魅了し続けている。この建物は昭和4年(1929年)11月に建設され今年で実に77歳を迎えたが、同じ世代の来館者、あるいはハンディキャップを持つ来館者にとって、はたして過ごしやすいものなのだろうか。大学の一機関である一方で、公共の施設でもある北大総合博物館は、求められる「バリアフリー」の概念がどこまで通用するのだろうか。この度博物館実習生の力を借り調査を行う機会を得たので、その結果をここに記すことにした。

バリアフリーに関しては平成6年(1994年)に「ハートビル法」が施行されており、これは、その正式名称「高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律」が示す通り、学校・病院・ホテルや体育館・下宿・博物館・郵便局などの特定建築物を新たに建てる・または改築する際に、高齢者やハンディキャップ・パーソンのために考慮すべき道幅・便所・スロープやエレベーターなどの基準を提示するものである。今回の評価はこのハートビル法に基づいて行った。

ハートビル法では、1. 出入り口、2. 廊下その他これに類するもの、3. 階段、4. 昇降機、5. 便所、6. 駐車場、7. 敷地内の通路の項目についてその幅や大きさ、素材、傾斜などの基準が示してある。6の駐車場を除き、これらの基礎的基準に照らして調査を行った結果浮かび上がった問題点は以下の数点である。

傾斜が急な玄関のスロープ



ひな壇設置前の化石展示を車いすの目線から

ひな壇設置後の化石展示

1. 出入り口
・3階の2つの展示室において「車いす使用者が通過する際に支障となる段」あり
・2階の1つの展示室において「内法80cm以上」でないものあり
2. 廊下その他これに類するもの
・玄関及び3階に設置したスロープの勾配が12分の1よりも急である
3. 階段
・手すりが設けられていない
・表面が木でできている階段は滑りやすい
・踏面の色とけあげの色とが明度の差の大きいものになっていない
・3階の1箇所を除き「注意喚起用床材」が敷設されていない

歴史的建造物ということもあり、そのおもむきや歴史性の保存のため対応が困難な部分もあるが、これらは今後博物館のバリアフリー化に向け優先的に検討すべき項目であろう。4. 昇降機、5. 便所、7. 敷地内の通路に関しては、広さ・設備など特に問題がなかった。

しかし総合博物館に常備してある車いすで実際に展示を回ってみると、予想以上にスムーズに移動できることに驚かされた。古い建物だが、博物館として広くたくさんの人に楽しんでもらえる最低限の機能性があることが分かった。が、同時に明らかになったのは、実は車いすの目線では見えにくい展示が多数存在することである。これは子どもの目線では展示がよく見えないことを示しており、これでは展示の教育的機能が十分に果たされない。今回の博物館実習ではこうした問題を考慮し、1階「生命―多様性と普遍性」及び「北を見る目・北から見る目―変動する北方ユーラシア」、3階「アイランド・アーク」の展示ケース内にひな壇を設置し、目線の高さによらず多くの人が展示を楽しめるよう改善を行った。

展示の改善は、多言語対応＝言葉のバリアフリー、踏み台やひな壇の設置＝世代や目線のバリアフリーと捉えることができる。これは来館者の裾野を広げることにつながるが、今後は障壁を取り除くことを目指すバリアフリーのみでなく、多様な人々が利用することをあらかじめ想定した「ユニバーサルデザイン」を展示に取り入れてゆくことが重要である。今回の博物館実習での展示改善はそうした活動の第一歩であり、実習生3人の総合博物館への貢献は非常に大きい。

※実習生3名のお名前：小川紘子さん、岩倉美沙子さん、楢木佑佳さん

小俣友輝(研究部助手／博物館情報科学)

寄附のお礼

総合博物館支援募金へのご寄附について心から感謝申し上げます。ご寄附は、当館の企画展示等に有効に使用させていただきます。このご厚志に対しまして職員一同感謝申し上げるとともに、ご寄附をいただいた方のご芳名(敬称略)をここにご報告し掲載させていただきます。

寄附者のご芳名 平成18年12月末現在　順不同

創人会 金津雪華、NHK文化センター新札幌教室室長 大橋智美、上條一昭、北大プロパー31会、
北海道博物館協会 学芸職員部会、増渕圭子、三島徳三、電気・情報関係学会北海道支部、総合博物館長 藤田正一

ボランティアの会会長就任のご挨拶

昨年5月26日に行なわれた北海道大学総合博物館ボランティアの会総会において、久万田敏夫初代会長の後任として認められました。よろしくお願いいたします。

総合博物館では、膨大な標本や資料の整理などのために2001年度からボランティア(正式にはボランティア活動員)を受け入れています。当初はボランティアどうしのつながりはなかったようですが、ボランティア組織の設立の声が高まり、総合博物館の承認のもとに「北海道大学総合博物館ボランティアの会」が発足し、2003年2月21日の第1回総会において会則などを制定するとともに、初代会長として久万田氏を選出しました。会の目的は、自らの意思に基づき、無償で北大総合博物館の活動をサポートするボランティアの相互の交流と親睦を図り、博物館活動へのサポートを円滑かつ効果的に行うことです。

発足当時は、ボランティアとしてはおもに北大の学生や院生が対象のようでしたが、現実には彼らは本来の講義や実験などがあり、十分な時間がとれないようです。現在のボランティアの会登録人員116名の内訳は、一般(52名)・院生(15名)・学生(27名:他大学生を含む)・研究員(7名:元職員を含む)・職員(6名)・留学生(9名)となっています。学外の一般の方が約半数を占めているのは、一般の方々の博物館に対する関心の深さを示すものと思います。ボランティアの会のメンバーは、それぞれの専門と興味により、植物標本(Ⅰ～Ⅳ班:46名)・昆虫標本(31名)・地学標本(鉱物・岩石:14名)・化石標本(17名)・考古学(4名)・展示解説(18名)・翻訳(12名)・遠友夜学校(4名)の各グループに分かれ(合計が登録人員を超えるのは、複数のグループに所属している人がいるため)、標本や資料の整理、来訪者の案内や解説にあたっています。

大学の役割として、これまでは教育と研究が重視されてきましたが、昨今はもう一つ、知の発信の場としての機能が重視されています。その際、社会ー大学間のもっとも重要な接点は図書館や博物館です。しかし、大学図書館は市民の皆さんには敬遠されぎみで、中央図書館で市民の方を見かけるのは少ないようです。その点、総合博物館はとくに土日曜日はかなりの市民でにぎわっており、北大を市民の皆さんにアピールする最高の場といえます。社会と大学との接点である博物館のなかで、社会(来館者)と博物館との接点として重要なのがボランティアです。したがって、ボランティアとしては、膨大な標本や資料の整理もさることながら、市民に博物館の展示(北大の発信)を分りやすく説明する展示解説の役割が重要になります。現在の展示解説グループをさらに強化する必要があると感じています。展示解説は博物館の広い分野の知識と解説技術も必要です。そのため、ボランティア個々人の意欲と努力とともに博物館側のボランティアへの教育・研修体制も重要であり、それを期待したいと思います。

ボランティアの会の登録人員は100名を超えていますが、会としての機能はまだ十分でなく、また、総合博物館の活動の中での役割もまだ十分には明確になっていないところもあります。これらについては、博物館の理解と協力を得て改善したいと思います。

北大は観光都市札幌の中心にあり、総合博物館は正門に近い北大を代表する由緒ある建築物にあります。展示内容も来訪者に評判がよいようで、来館者数は大学博物館のなかでもトップクラスと聞いています。教職員・支援スタッフ・ボランティア活動員の3者でさらに力を合わせ、総合博物館を北大のカンバンに、そして札幌の知の中心としたいものです。

在田一則
(ボランティアの会会長／地質学)

平成18年4月から平成18年9月までにおこなわれたセミナー

第130回　北大創基130周年記念企画展示
「北大樺太研究の系譜」関連セミナー
「北大植民学の樺太研究」
竹野　学(大学院経済学研究科・研究生)
日時:4月1日(土曜日) 13:30－15:00(参加者約40名)

第131回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「北大に通底する精神のルーツを探る」
藤田　正一(総合博物館・館長)
日時:4月8日(土曜日) 13:30－15:00(参加者約80名)

第132回　北大創基130周年記念企画展示
「北大樺太研究の系譜」関連セミナー
「サハリンにおける古生物学研究の展開」
小林　快次(総合博物館・助手)
「地質屋たちの肖像ーデスモスチルス発掘と"長尾ノート"」
川村　信人(大学院理学研究院・助教授)
日時:4月15日(土曜日) 13:30－16:00(参加者約80名)

第133回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「ダイアモンドで地球内部をのぞくー超高圧高温の世界ー」
瀬戸　雄介(大学院理学院・COE学術研究員)
日時:4月22日(土曜日) 13:30－15:00(参加者約60名)

第134回　北大総合博物館セミナー
「アムール下流域の考古学」
イーゴリ・シェフコムート(ハバロフスク国立極東博物館・考古学部長)
日時:4月27日(木曜日) 18:00－20:00(参加者約30名)

第135回　北大創基130周年記念企画展示
「北大樺太研究の系譜」関連セミナー
「オホーツク文化の解明に挑むー北海道・樺太・千島」
天野　哲也(総合博物館・助教授)
日時:4月29日(土曜日) 13:30－15:00(参加者約40名)

第136回　北大創基130周年記念企画展示
「北大樺太研究の系譜」関連セミナー
「北海道と大陸をつなぐ島ーサハリンの地質と地下資源」
岡　孝雄(道立地質研究所・地域地質部長)
日時:5月6日(土曜日) 13:30－15:00(参加者約30名)

第137回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「北大キャンパスの微妙な凹凸（地形）の由来」
平川　一臣（大学院地球環境科学研究院・教授）
日時：5月13日（土曜日）13：30－15：00（参加者約120名）

第138回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「海洋調査船上での生活－ドイツ国海洋調査船ゾネ号185次航海を例として－」
川村　裕（大学院理学研究院・COE学術研究員）
日時：5月27日（土曜日）13：30－15：00（参加者約50名）

第139回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「妹輔子・原敬のことなど―初代総長佐藤昌介断想」
逸見　勝亮（北海道大学理事・副学長）
日時：6月10日（土曜日）13：30－15：00（参加者80名）

第140回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「深海底の冷たい火山」
井尻　暁（大学院理学研究院・COE学術研究員）
日時：6月24日（土曜日）13：30－15：00（参加者約80名）

第141回　北大総合博物館セミナー
「北大キャンパスの遺跡・植物・昆虫観察会（野外観察会）」
高橋　英樹（総合博物館・教授）、天野　哲也（総合博物館・助教授）、大原　昌宏（総合博物館・助教授）
日時：6月25日（日曜日）13：30－15：30（参加者約190名）

第142回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「海の生物にくすりを求めて」
小林　淳一（大学院薬学研究院・教授）
日時：7月8日（土曜日）13：30－15：00（参加者約90名）

第143回　北大創基130周年記念企画展示
「北大の山小屋展」関連セミナー
「『少年よ、大志を抱け』と北大の山小屋」
阿部　幹雄（画像ジャーナリスト）
「山小屋の思い出」
加藤　幸子（芥川賞作家）
日時：7月9日（日曜日）13：30－15：00（参加者約40名）

第144回　第34回企画展示「2000年　有珠山噴火」関連セミナー
「2000年有珠山噴火を振り返る～活ける山との付き合い方～」
岡田　弘（大学院理学研究院・教授）、田鍋　敏也（壮瞥町役場）、三松　三朗（三松正夫記念館）
日時：7月15日（土曜日）13：00－16：00（参加者約70名）

第145回　北大総合博物館セミナー
「カルチャーナイト2006・スター＆ミュージック」
日時：7月21日（金曜日）16：30－21：00（参加者約170名）

第146回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「植物を食べる昆虫はなぜ種数が多い？－食植性テントウが教えてくれること－」
片倉　晴雄（大学院理学研究院・教授）
日時：7月22日（土曜日）13：30－15：00（参加者約60名）

第147回　第35回企画展示「モンゴルの恐竜展」関連セミナー
「モンゴルの恐竜」
小林　快次（総合博物館・助手）
日時：7月30日（日曜日）14：00－15：30（参加者約100名）

第148回　北大総合博物館セミナー
「水草研究会第28回全国集会」市民セミナー
「水辺のレッドデータ植物と生育環境－近畿地方を例に－」
藤井　伸二（人間環境大学・助教授）
「札幌とその周辺の水草を調べる」
山崎　真実（札幌市博物館活動センター・学芸員）
日時：8月5日（土曜日）10：30－12：00（参加者約60名）

第149回　北大創基130周年記念企画展示
「北大の山小屋展」関連セミナー
「ヘルヴェチアヒュッテ・ログハウス・樹木」
小泉　章夫（大学院農学研究院・助教授）
「マックス・ヒンデルと山小屋」
角　幸博（大学院工学研究科・教授）
日時：8月5日（土曜日）13：30－15：30（参加者約50名）

第150回　第35回企画展示「モンゴルの恐竜展」関連夏休み子どもセミナー
「ステゴサウルスのなぞ」
林　昭次（大学院理学院・大学院生）
日時：8月6日（日曜日）13：00－15：00（参加者約100名）

第151回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「札幌農学校に始まる道産米ものがたり」
太田原　高昭（北海学園大学・教授／北海道大学・名誉教授）
日時：8月12日（土曜日）13：30－15：00（参加者80名）

第152回　北大創基130周年記念企画展示
「北大の山小屋展」関連セミナー
「国立公園と山小屋」
鍛冶　哲郎（環境省・国立公園課長）
「札幌周辺の山と花」
梅沢　俊（植物写真家）
日時：8月19日（土曜日）13：30－16：00（参加者約100名）

第153回　第35回企画展示「モンゴルの恐竜展」関連夏休み子どもセミナー
「恐竜時代の海」
越前谷　宏紀（総合博物館・資料部研究員）
日時：8月20日（日曜日）13：00－15：00（参加者約60名）

第154回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「統合国際深海掘削計画（IODP）の目指すところ」
岡田　尚武（大学院理学研究院・教授）
日時：8月26日（土曜日）13：30－15：00（参加者約50名）

第155回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「ソビエト期ロシアの労働教育・ポリテフニズム教育の理論と実践」
所　伸一（大学院教育学研究科・教授）
日時：9月9日（土曜日）13：30－15：00（参加者75名）

第156回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「海藻の話」
栗原　暁（大学院理学院・COE学術研究員）
日時：9月16日（土曜日）10：30－12：00（参加者35名）

第157回　北大創基130周年記念企画展示
「二十一世紀の武士道」関連セミナー
「二十一世紀の武士道－今よみがえる札幌農学校精神」
藤田　正一（総合博物館・館長）
日時：9月16日（土曜日）13：30－15：30（参加者65名）

平成18年4月から平成18年9月までの主な出来事

18年 4月 1日　第32回山口県少年少女の船一行見学（130名）
18年 4月 6日　中国南開大学一行見学（4名）
18年 5月12日　北海道旭川北高等学校生徒見学（124名）
18年 5月17日　韓国学術院人文社会系グループ見学（21名）
18年 5月20日　北海道教育大学岩見沢校学生見学（50名）
18年 5月28日　シンガポール少年少女交流事業一行見学（17名）
18年 6月 2日　文科省高等教育局専門教育課　柿田企画官視察（2名）
18年 6月 5日　韓国高麗大学ご一行・戸倉清一北大名誉教授視察（30名）
18年 6月 6日　第32回企画展示「金津墨岱（雄三）遺蔵書作品展」（7月2日まで）
18年 6月13日　北海道東陵高等学校生徒見学（298名）
18年 6月16日　文科省科学技術・学術制作局調査調整課　有松育子課長視察（2名）
18年 6月23日　JAICA一行見学（12名）
18年 6月28日　韓国慶熙大學校教員・学生見学（22名）
18年 7月 1日　特任教授　L.D.ドゥリュウエル博士（海産藻類学）着任
18年 7月 4日　北大創基130周年記念企画展示「『北大の山小屋』展」（10月15日まで）
18年 7月 5日　三重県立桑名高等学校生徒見学（106名）
18年 7月11日　第34回企画展示「2000年有珠山噴火～活きる山と生きる～」（8月6日まで）
18年 7月13日　日本学術振興会一行見学（9名）
18年 7月16日　北大医学部42期40周年同期会一行見学（22名）
18年 7月19日　開拓の村ボランティア一行見学（47名）
18年 7月20日　北大生涯学習学友会一行見学（60名）
18年 7月21日　7大学施設部長会議一行見学（17名）
18年 7月21日　中国東北師範大学代表団一行見学（7名）
18年 7月21日　「カルチャーナイト2006」参加による博物館夜間開放および映画上映会等（延べ166名）
18年 7月22日　第35回企画展示「モンゴルの恐竜展」（8月26日まで）
18年 7月25日　韓国仲南大学校工科大学一行見学（5名）
18年 8月 7日　文科省科学技術・学術政策局　町田大輔国際交流官視察（1名）
18年 8月26日　札幌市元町連合町内会一行見学（80名）
18年 8月30日　滋賀県立水口東高等学校生徒見学（106名）
18年 9月 4日　北大創基130周年記念企画展示「二十一世紀の武士道～北大に通底する精神の系譜～」（11月26日まで）
18年 9月 6日　和歌山県立新宮高等学校生徒見学（289名）
18年 9月12日　北大創基130周年記念企画展示「北海道農業の発展と北大農場」（9月24日まで）
18年 9月13日　三重県議会教育警察常任委員会一行視察（9名）
18年 9月22日　東北・北海道地区国立大学附置研究所等事務（部）長会議一行見学（13名）
18年 9月29日　クラーク博士ご子孫・元スワード市長Mr. Stu Clarkご夫妻見学（7名）

お知らせ

●第31回企画展示「誕生石展」が平成18年4月1日から平成19年3月31日まで開催されています。

●スポット展示「北海道大学の昆虫」が平成18年10月31日から12月27日まで開催されました。

●スポット展示「スゲを見つめ続けた研究者」が平成18年10月31日から12月27日まで開催されました。

●スポット展示「出田新氏宛て郵便資料展」が平成18年11月28日から開催されています。

●第40回企画展示「知床の自然環境と人びと～考古学・保全生態学の研究成果から～」が平成18年12月12日から平成19年1月19日まで開催されました。

●第42回企画展示「北大職員写真同好会写真展『Sapporo　Natur Art』」が平成19年1月30日から2月12日まで開催されています。

◆

●第43回企画展示「北大千島研究の系譜～千島列島の過去・現在・未来～」が平成19年2月20日から5月6日までの予定で開催されます。

お　礼

以下のボランティアの方達に、学術標本作製・企画展示準備等で協力いただきました。謹んでお礼申し上げます（平成18年4月～平成18年9月）。

植物標本（市民・職員）：浅井和代、石岡真子、稲荷尚記、小渕修子、加藤ゆき恵、桂田泰恵、金上由紀、菊池佐和子、久志本アイ、黒田シズ、佐川景子、高橋美智子、近久喜枝、星野フサ、持田誠、矢島慶子、与那覇モト子、若狭美智子。
植物標本（学生）：伊澤岳師、岩崎健、上原久美子、川角法子、国安岳、栗原太郎、佐藤広行、サルワルA.K.M.ゴラム、成田敦史、堀端純平、宮澤誠治、村上麻季、山室育子、庄山紀久子、深草祐二、北大自然史研究会（岩瀬良太、荻野篤史、神谷英美、木村耕、権平拓也、田沢陸、寺田岳、松田紘美、水田卓志、山田菜月）、酪農学園大学野生動物生態研究会（鈴木卓也、武良佳織、津久浦朱美、畑中由紀、吉原絵美）。
昆虫標本：久万田敏夫、梅田邦子、青山慎一、宮敏雄、稲荷尚記、広永輝彦、永山修、斉藤美智子、栗田和紀、櫛引靖子、喜多尾利枝子、松本千春、小原悦子、長尾弘子、須永直実、米田友祐、宮崎恵子、神保祐介。
古生物学：相原大介、石橋七朗、岡田美佐子、小出竜士、田中康平、寺西辰郎、周田高宏、中野系、永山修、細川清映、箕浦名知男、宮敏雄、望月直、安田正、吉田麻依子。
考古学：山本佳奈、斉藤美智子、鈴木理沙、宮塚雅子、福本郁哉、福本敬。
鉱物学：在田一則、高橋亮平、鳥本准司、岡田美佐子、佐々木宏美、寺西辰郎、安田正、福地伸章。
展示解説：在田一則、佐藤広行、中野系、永山修、沼田勇美、広永輝彦、星野フサ、村井容子、望月直。

（敬称略）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース　第14号
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース
編集：高橋英樹・松田由香
発行日：2007年（平成19年）1月・発行者：藤田正一
発行所：北海道大学総合博物館
住所：060-0810　札幌市北区北10条西8丁目
電話：011-706-2658・FAX：011-706-4029
E-mail：museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/
印刷：株式会社アイワード